

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1/ 1)

研究題目	日本電子音楽の特質～60年の歴史検証を通して～	報告書作成者	西岡龍彦
研究従事者			
研究目的	<p>この研究は、日本電子音楽協会創立 20 周年事業として、2 日間のコンサート、2 回のレクチャーと 1 回のシンポジウムによって、約 60 年に及ぶ電子音楽の歴史と、日本独自の電子音楽の創作技法や日本のアナログシンセサイザやデジタルシンセサイザの開発と普及の歴史を検証することを目的としている。</p> <p>イギリスの DE MONTFORT 大学がユネスコのプロジェクトとして作成している電子音楽のデータベース EARS や、ソルボンヌ大学、北京中央音楽院などでアジアの電子音楽のデータが集められ研究が進展する中で、日本の電子音楽への海外からの関心が一段と強くなっている。川崎弘二氏の「日本の電子音楽」、水野みか子氏による「大阪万博鉄鋼館の音楽」の研究、また、東京藝術大学大学院音楽音響創造研究分野など、いくつかの大学でも日本の電子音楽に関する論文が見られるようになってきた。また、昨年 5 月には、アジアの電子音楽に関する研究者で、ソルボンヌ大学の Marc Battier 教授(フランスの電子音楽のデータベースの中心人物)が来日し、電子音楽の情報交換も活発に行われている。日本の電子音楽の基本的な歴史研究は一応の成果を挙げ、今後は、世界の研究者に利用可能なより正確なデータベースの構築と共に、ヨーロッパからの受容、アメリカとの関係、アジアの中での位置づけなど他国との電子音楽の関係を明らかにしていくこと、また、個別の作品の分析と作曲家の研究、日本独自の創作技術、ポップスなど他の音楽ジャンルとの関係や時代毎の文化や経済との関係などの研究が課題として挙げられるだろう。</p> <p>NHK 電子音楽スタジオでの作曲家とエンジニアによる創作技法と日本の電子楽器メーカーによる楽器やエフェクターの設計思想をそれぞれ現場で直接関わった技術者のレクチャーによって、日本の電子音楽の 1960 年代の「創作技法の特徴」と「日本の電子音楽と電子楽器・電子機器の開発」に焦点を当て、シンポジウムによる約 60 年に及ぶ日本の電子音楽の歴史を概観して今後の研究への問題提起を行った。</p>		

研究内容

2013年3月6日、7日、8日の3日間、アサヒ・アートスクエアにおいて日本電子音楽協会創立20周年事業「時代を超える電子音楽」が開催され、第3日目(3月8日)が、当研究助成のレクチャーとシンポジウム「日本の電子音楽～60年の歴史的検証～」であった。

全体は、2つのレクチャーとシンポジウムからなり、最初のレクチャーは、日本独自の創作技法、特に1960年代のNHK電子音楽スタジオにおける作曲家と技術者の共同制作に焦点をあて、西洋音楽の作曲家と演奏家の最も重要な伝達手段である楽譜に相当する周波数やダイナミクスが記されたスコアがどのようなものであったか、また、専門分野のことなる作曲家とエンジニアの間でどのような意思疎通が行われたかを、諸井誠作曲「ヴァリエテ」、湯浅譲二作曲「プロジェクション・エセムプラスチック」「アイコン」を例に、元NHK音響技術者であった佐藤茂氏によるレクチャー「NHK電子音楽スタジオ～音の始原を求めて～」で明らかにした。

2つ目のレクチャーは、「日本の電子楽器と電子機器の開発」をテーマに、元MIDI企画協議会会長の則安治男氏によって「電子楽器開発の成功と失敗」と題して、電子楽器とこれまでの楽器との関係、従来の楽器を模倣した「電子ピアノ」や新しい発想で開発された「ヴォコーダー」に関わる研究上のこれまで明らかにされてこなかった様々な実験について述べられた。

さらに、西岡による司会・進行でパネリスト川崎弘二氏、沼野雄司氏、水野みか子氏を迎えて、日本の電子音楽の歴史上特徴的な事象について検証した。ヨーロッパからの影響を受けつつ1950年代にNHK電子音楽スタジオから始まった日本の電子音楽の発展の特徴、ターニングポイントとなるイベントや作品、また、それぞれの時代における文化、産業、経済、メディアとの関係にも話が及んだ。

これらのレクチャーとシンポジウムでは、歴史上電子音楽の初期において特に注目される作品4曲(「諸井誠作曲『ヴァリエテ』」湯浅譲二作曲『プロジェクション・エセムプラスチック』『アイコン』武満徹作曲『水の曲』)が選ばれ、全曲が最適の音響で再生されることによって、受講者に具体的な理解が得られるように配慮した(音響・マスタリング:有馬純寿)。

当研究助成の対象は、日本電子音楽協会創立20周年事業の3日目「日本の電子音楽～60年の歴史的検証～」のみであるが、日本の電子音楽をテーマにした3日間全体の企画を西岡が行った。

第1日は、「騒音芸術百年(構成:渡辺 愛)」というテーマで、ルイージ・ルッソロによって1913年3月、芸術の領域にノイズを持ち込むことを提唱した「騒音芸術(Art of Noise)」の発表を受けて、日本電子音楽協会会員による6作品のコンサートが行われた。第2日は「不易流行(構成:水野みか子)」というテーマで、日本の電子音楽の歴史のなかでJSEM(日本電子音楽協会)が果たした20年間を振り返り、創設当時の3作品の再演と「いま」の時代を浮き彫りにするような新作4曲のコンサートであった。

研究概要報告書【音楽振興部門】

(/)

<p>研究のポイント</p>	<p>日本の電子音楽の特質をレクチャーとシンポジウムによって検証した。</p> <p>このレクチャーとシンポジウムは、日本電子音楽協会創立 20 周年記念事業として企画された 3 日間の最後に置かれ、1 日目には、ルイージ・ルッソロの「騒音芸術」発表から 100 年目であることをテーマとしたコンサート、2 日目には、日本電子音楽協会が果たした 20 年と新しい日本の電子音楽を紹介するコンサートが設定されていて、これらのコンサート、レクチャーとシンポジウムの関連からも、日本の電子音楽の特質が理解できる企画とした。</p>
<p>研究結果</p>	<p>佐藤 茂氏によるレクチャーでは、「1960 年代の NHK 電子音楽スタジオにおけるエンジニアと作曲家による制作技法」がどのようなものであったか、また、則安治男氏によるレクチャーでは、世界の電子音楽に多大の影響を与えた日本が誇る音響テクノロジー「電子楽器、電子音響機器の開発」がどのような思想と技術であったのかを明らかにして、今後期待される「日本の歴史的な電子音楽作品の創作技法」や「電子音楽と文化・産業」などの研究への提案と新たな資料の提示を行った。</p> <p>また、シンポジウムでは、日本の電子音楽の歴史的検証を通じて、その特質をこれまでにない視点(例えばポップスなど他ジャンルと電子音楽の関係など)から研究する試みも示された。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>日本の電子音楽史上重要な作品の資料収集と分析を行う。</p> <p>世界の研究者が利用可能な日本の電子音楽のデータベースとネットワークを作る。</p> <p>アジアの電子音楽の創作・研究のネットワークを構築する。</p>

1. 日本電子音楽協会創立 20 周年記念事業「時代を超える電子音楽」チラシ
2. 日本電子音楽協会創立 20 周年記念事業「時代を超える電子音楽」パンフレット
3. 事業 3 日目 (3 月 8 日) レクチャーとシンポジウム「日本の電子音楽～60 年の歴史的検証～」写真 4 葉
 - ①レクチャー1. 佐藤 茂氏
 - ②レクチャー2. 則安治男氏
 - ③シンポジウム 司会・進行: 西岡龍彦、パネラー: 川崎弘二氏、沼野雄司氏、水野みか子氏
 - ④作品再生

(注: 写真, データ, グラフ等 研究内容の補足説明にご使用下さい。)